

短 報

終末期患者の「希望」を支える看護の検討  
—看護教育関連文献にみる「希望」記述の調査—

上原 星奈\* 清水 裕子\*

Study of Nursing Care Supports Hope in End-of-life Patients  
—Survey on Hope Description Using the Nursing Education Literatures—

Hoshina UEHARA, Hiroko SHIMIZU

Key Words : Hope, Nursing education, Terminal care

I. 問題と目的

1. 背景

わが国では、2018年のがんによる死亡者数は37万3,584人であり(厚生労働省, 2019), 終末期看護を必要としている。木村(2009)は, 死に直面したときに示すわれわれの反応は, 往々にして, 絶望と希望, 不満・恨みと感謝, 怒りと平静, 抑うつと過剰な活動などさまざまな種類と程度の, 矛盾に満ちた揺れ動きになると述べた。終末期がん患者は, 病状の進行に伴い痛みが増強し, 消失することのない身体的苦痛を抱える。国際疼痛学会(International Association for the Study of Pain)は, 痛みが, 身体の一部, あるいはいくつかの部分にわたって起こる感覚であることには議論の余地がないが, いつも不快な体験であるため, 痛みは常に感情的な体験であると説明した。(世界保健機関, 1990)。つまり, 終末期がん患者は, 常に不快な体験をしており, 絶望や不満, 怒りなどのネガティブな感情に陥っている。ネガティブな感情によって痛みはさらに増強することから, 看護師は, 患者のポジティブな感情に対するケアを行

うことにより痛みの軽減を図る必要がある。

20世紀までには, 戦争や災害などの時代背景により, ト라우マやストレスなどのネガティブな側面に対してどのように対応し回復していくかとの問題に研究者は着目した。その結果, 研究の焦点は, 人間という存在が病んでいることを前提として問題に介入することになった。1998年にSeligmanによってポジティブ心理学が提唱され, 21世紀には, 人間のポジティブな面を重視する方向へとパラダイムがシフトした。ポジティブ心理学の研究が進むにつれ, ポジティブな感情は, 心理的に良い状態を示すことや, 身体的にも健康で長寿をもたらすことが明らかになった(島井, 2006)。つまり, 終末期のがん患者に対して, 絶望や不満, 恨み, 怒りなどのネガティブな感情に介入するのではなく, ポジティブな感情に介入する方向へと変化した。

ポジティブな感情は思考や行動の柔軟性を高め, ウェルビーイングの向上につながる(島井・小林, 2020)。終末期がん患者のポジティブな感情を支えることは, 今よりも良い状態でその人らしい生を全うさせうるものと考えられる。

\* 香川大学自然生命科学系 (Academic Group of Life Sciences, Kagawa University)  
受領2019.6.3 受理2020.9.12

未来に対するポジティブな感情には、信念、信頼、自信、希望、楽観がある(セリグマン, 2004)。この中で「希望」は、信念や信頼、自信、楽観の基となる。柏木・大橋・恒藤(2003)は、希望は人が生きていく上で必要不可欠なものであることはこれまで多くの研究者によって指摘されたと述べ、さらに、希望がもたらされる事象を体験した際には、未来に対する明るさのみならず、過去・現在における快調な感情が生じると説明した。つまり、看護師が、終末期がん患者の「希望」を支えることができれば、患者の未来に対する感情のみならず、過去や現在に対する感情もポジティブにさせることができ、人生の統合を支援できるのである。

現在の人材確保政策にかかる看護教育は、厚生労働省と文部科学省の方針のもとで、1992年『看護師等の人材確保の促進に関する法律』(電子政府総合窓口, 2015)の施行に始まり、『看護師の確保を促進するための措置に関する基本的な指針』に則り行われている。基本指針の内容として、看護師の養成、処遇改善、資質の向上、就業の促進などであった(厚生労働省, 2015)。背景には、少子高齢社会による労働人口の減少や医療の高度化・専門化などから、看護師の需要が高まると予想されたことが挙げられる。2004年以降、看護師等の人材を確保するために、文部科学省の『大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会』(文部科学省, 2020)や厚生労働省の『看護基礎教育検討会』(厚生労働省, 2019)が発足し、看護教育についても検討された。看護師等の養成学校では、社会情勢を把握し、医療の高度化・専門化や国民の多様なニーズに対応できるリーダーとなる看護師を養成することが求められた。さらに、卒業までに育成される実践能力のうち、終末期にある人への援助については、「死にゆく人の自己実現(希望の実現)への支援」と定めた(厚生労働省, 2015)。したがって、看護教育において、社会情勢を見極めるために、中央省庁の行政文書を用

いて国の政策を把握し、死にゆく人の自己実現(希望の実現)への支援をできるように看護学生に教育する必要がある。そのために、看護教育関連文書として看護学教科書と行政文書から、看護学における「希望」の教育内容を明らかにすることにより、終末期患者の自己実現(希望の実現)を支える看護の基礎資料となる。その結果、「希望」が患者ケアの中で意図的に活かされる期待がもてると考える。

## 2. 研究目的

本研究の目的は、看護学生が看護教育関連文書において学習する「希望」の内容を明らかにすることである。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン

研究デザインは、質的帰納的探索型研究デザインである。具体的には対象の看護教育関連文書における索引や章のタイトルから該当箇所を抽出し、「希望」記載内容がどのように分類することができるか、また「希望」はどのように学習されているのかを探求することである。

### 2. 用語の操作的定義

本研究における希望、看護教育関連文献、看護学教科書、行政文書の4つの用語の定義を以下に示す。

#### 1) 希望の操作的定義

「希望」とは、(－する)こいねがうこと、あることが実現することを待ち望むこと、また、その気持ち、のぞみ、願望であり、また、将来への明るい見通し、のぞみ、可能性、見込み(日本国語大辞典, 2001)と定義する。

#### 2) 看護学教科書の操作的定義

教科書とは、発行法第2条より、小学校、中学校、

義務教育学校，高等学校，中等教育学校及びこれらに準ずる学校において，教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として，教授の用に供せられる児童又は生徒用図書であり，文部科学大臣の検定を経たもの又は文部科学省が著作の名義を有するものと定められている（文部科学省，2009）。看護師等の養成学校は，検定教科書を用いることについて定められていない。本研究において，「看護学教科書」とは，日本国内の出版社が発行した看護系図書のうち，各出版社の出版物の中から教科書に分類されているもの，または，内容が教科書に類するものであり，専門学校や大学における参考図書を含むものと定義する。

### 3) 行政文書の操作的定義

厚生労働省の行政文書に関する判断基準（法第2条第2項）において，行政文書とは，行政機関の職員が職務上作成し，または取得した文書，図画及び電磁的記録であって，行政機関の職員が組織的に用いるものとして，当該行政機関が保有しているものをいう註）。本研究において「行政文書」とは，行政機関の職員が職務上作成し，中央省庁のホームページに掲載されている文書と定義する。

### 4) 看護教育関連文書の操作的定義

「看護教育関連文献」とは，「看護学教科書」と「行政文書」の総称と定義する。

## 3. 調査期間

調査期間は2018年9月から2020年8月であった。

## 4. 研究対象

研究対象は，1999年から2020年の22年間に出版された終末期看護，緩和ケア，ターミナルケア，成人看護学の教科書と2008年から2018年に看護業務及び看護師養成を管轄する省庁である厚生労働省及び文部科学省から発信された行政文書で

あった。

看護学教科書の選定として，看護系の先行研究において，終末期看護や緩和ケアの分野において「希望」が取りあげられていることが多いため，教科書の題名が終末期看護，緩和ケア，ターミナルケアのものにした。同一シリーズの看護学教科書は1件として取り扱い，改定された場合は，最新版を用いた。さらに，同じ出版社から終末期看護，緩和ケア，ターミナルケアの教科書と成人看護学の教科書が出版されている場合は，成人看護学の教科書は対象としないこととした。

また，がんなどの疾患により余命宣告をされ，死に直面した患者は，自己存在の価値を見出すことができなくなり，生きる意味を失ってしまうと考えられる。そのような時に「希望」が生きる支えとなる。老年期の患者の中にも，がんなどの疾患により自己存在の価値を見出すことができなくなることもある。したがって，「老衰による死」を取り上げず，がんなどの疾患による終末期患者の学習を念頭に置くこととして，老年看護学の分野を含まないこととした。

行政文書は，過去10年間の文書保存期間であるため，2008年から2018年における「希望」の活用が最も予測できる「終末期医療」に関する行政文書を対象とした。

## 5. データの収集

データの収集は，対象の看護教育関連文書のうち，索引または，各章の小タイトルに「希望」という単語が含まれているページを探索した。次に，「希望」という単語が含まれているページにおいて，「希望」記載箇所の前後文章を抽出した。

## 6. 分析方法

分析方法は，索引，または，各章の小タイトルに「希望」という単語が含まれている看護学教科

註）厚生労働省厚生労働省が保有する行政文書の開示請求に対する開示決定等に係る審査基準，<https://www.mhlw.go.jp/jouhou/koukai03/01.html>（参照日：2020年8月23日）

書と行政文書の件数, 看護学教科書では全ページ数における「希望」の記載ページ数割合と出版年を記述的に算出した。

抽出した「希望」記載箇所の実験方法は、内容分析であった。具体的には、「希望」記載内容において、「希望」の定義または説明が示されているかによって分類した。また、引用もしくは参考文献が記載されている箇所は、原典を探索し、原典の「希望」の定義や「希望」記載内容を調査した。分析過程において、30年以上看護学・心理学を研究する共同研究者からスーパーバイズを受け、結果の妥当性を担保した。

### Ⅲ. 結果

対象の看護学教科書14件のうち、索引、または、各章の小タイトルに「希望」という単語が含まれ

ているのは6件であった。行政文書は、厚生労働省から発信された「終末期医療」に関する文書2件に「希望」という単語があった。文部科学省の行政文書には「終末期医療」に該当する文書は見当たらず0件であった。

6件の看護学教科書における「希望」記載内容の出題頻度は、全ページ数の0.5～1%に占める割合であった。終末期看護や緩和ケア、ターミナルケアの教科書の初版は、2000年以降に出版されていた。

看護学教科書6件と行政文書2件の「希望」記載内容を分類した結果は、「希望」の定義や説明が記載されておらず、「希望」という単語のみの箇所と「希望」の定義や説明が記載されている箇所の2つに分類された。2つのカテゴリーは、「希望」の単語のみの箇所は「国語辞典の引用」とし、「希望」の定義や説明が記載されている箇所は「研究論文

表1. 看護教育関連文献の分類

分類	年代	看護教育関連文献	記載場所
国語辞典の引用	2018	厚生労働省医政局看護課(2018)。「人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会」.	(2) 普及・啓発の内容 p7-11
	2017	6. 白井由紀(2017). 田村恵子(編), 新体系看護学全書経過別成人看護学④終末期看護: エンド・オブ・ライフケア(第1版, 第4巻). メヂカルフレンド社.	第I章終末期における患者とのコミュニケーションII終末期患者の希望を支えるコミュニケーションB終末期のコミュニケーション2. 終末期患者の希望を支えるコミュニケーションの実際 p97-98
	2011	4. 田墨恵子(2011). IIIターミナル期にある人とその家族への看護援助③希望を支えるケア. 鈴木志津枝, 内布敦子(編). 成人看護学緩和・ターミナルケア看護論. ヌーヴェルヒロカワ.	IIIターミナル期にある人とその家族への看護援助③希望を支えるケア①希望のとらえ方 p109
	2008	厚生労働省医政局総務課(2008)。「安心と希望の医療確保ビジョン」.	「安心と希望の医療確保」のための3本柱
	2000	1. 恒藤暁, 成嶋澄子(2000). 柏木哲夫, 藤腹明子(編). 系統別看護学講座別巻10ターミナルケア. 医学書院.	第5章精神的に支え7希望を持って支える. 第6章子どものターミナルケアD. 子供にとっての死の受容のプロセスと告知 p148,207
研究論文の引用	2017	6. 白井由紀(2017). 田村恵子(編), 新体系看護学全書経過別成人看護学④終末期看護: エンド・オブ・ライフケア(第1版, 第4巻). メヂカルフレンド社.	第I章終末期における患者とのコミュニケーションII終末期患者の希望を支えるコミュニケーションB終末期のコミュニケーション1. 終末期患者の希望: 日本人にとっての「望ましい死」 p96,98-99
	2013	3. 島井哲志(2013). 清水裕子(編). ヒューマンケアと看護学. ナカニシヤ出版.	第3節絶望感とヒューマンケア4. 楽観性から希望理論へ p41-42
	2011	4. 田墨恵子(2011). 鈴木志津枝, 内布敦子(編). 成人看護学緩和・ターミナルケア看護論. ヌーヴェルヒロカワ.	IIIターミナル期にある人とその家族への看護援助③希望を支えるケア p108-109
	2007	2. 平山正実(2007). 平山正実(編). 新体系看護学全書別巻10生と死の看護論(第2版, 第10巻). メヂカルフレンド.	第1章死を考える②死の心理学; 死の受容に至るプロセス 死の受容に至るプロセス p15
	2003	5. 射場典子(2003). 中西睦子, 大森美津子, 田村恵子(編). TACS シリーズ・6成人看護学—終末期. 建帛社.	第2部援助のための概念I看護援助のためのキー概念6—希望①はじめに p151-155

表2. 「希望」記載箇所の原典

E. キューブラー＝ロス (1971) . 死ぬ瞬間 死とその過程について . 鈴木晶 (訳) . 読売新聞社 . 東京 .
ミルトン・メイヤロフ (1971) . 田村真 向野宣之訳 . ケアの本質 生きることの意味 . ゆるみ出版 . 東京 .
Erikson, E.H (1971) . 鎌幹八郎訳 . 洞察と責任 . 誠信書房 . 105-160 . 東京 .
Joyce Travelbee (1974) . 人間対人間の看護 . 長谷川浩, 藤江知子 (訳) . 医学書院 . p110 . 東京 .
ミカ書7章7節脚注 (1981) . 聖書一新改訳注解・索引・チェーン式引照付 . 旧約新約聖書 . いのちのことば社 . p1401 . 東京 .
ミカ書7章7節 (1981) . 聖書一新改訳注解・索引・チェーン式引照付 . 旧約新約聖書 . いのちのことば社 . p1401 . 東京 .
ローマ人への手紙5章5節 (1981) . 聖書一新改訳注解・索引・チェーン式引照付 . 新約新約聖書 . いのちのことば社 . P271 . 東京 .
ローマ人への手紙13章13節 (1981) . 聖書一新改訳注解・索引・チェーン式引照付 . 新約新約聖書 . いのちのことば社 . P308 . 東京 .
Lazarus, R.S., Folkman, S. 本明寛他監訳 (1991) . ストレスの心理学 . 実務教育出版 . 167-170 . 東京 .
Snyder et al, (1996) . Development and validation of the State Hope Scale, Journal of Personality and Social Psychology, 70, 321-335
新村出編 (1998) . 広辞苑第5版 . 岩波書店 . P666 . 東京 .
射場典子 (2000) . ターミナルステージにあるがん患者の希望とそれに関する要因 . 日本がん看護学会誌 . 14 (2) . 66-77 .
Miyashita, M. et al. (2007) . Good death in cancer care; a nationwide quantitative study, Annals of oncology. 18 (6) . 1090-1097 .
ネッサ・コイルほか著, 照林社編集部訳 (2007) . 緩和ケアマニュアル第5版 . 照林社 . P15 . 東京 .
Watson, J.: Nursing, The Philosophy and Science Caring, Little, Brown, 12-16 .

の引用”とした(表1)。

“研究論文の引用”において原典を探索した結果, Nessa Coyleらや淀川キリスト教病院の緩和ケアマニュアル, Snyderらのhope理論, Kübler-Rossの研究論文, Travelbee, Mayeroff, Erikson, Lazarusなどの理論家の「希望」の定義が引用されていた。引用された研究論文の「希望」の定義は, 将来の望ましい状態へ行動を起こす原動力となるという認知的な特徴を示すものであった。Lazarusは, 信念という言葉を用いて感情的な特徴を「希望」に示していた(表2)。

#### Ⅳ. 考察

2000年以降に各出版社で終末期看護やターミナルケア, 緩和ケアの教科書の初版が出版されていたことから, 国として終末期医療に対する検討会が行われたことや看護教育のあり方が検討され

たことが要因として考えられる。終末期医療の変遷をみると, 終末期医療にかかる診療報酬は, 1986年の訪問診療が導入されたことから始まった。また, 1991年にはホスピス・緩和ケア病棟に対する「緩和ケア病棟入院料」, 2002年「緩和ケア診療加算」, 2006年には「在宅療養支援診療所」の制度が設けられた(田村・笹原・梅田, 2018)。このように終末期医療の診療報酬改訂は, 国民の終末期医療や看護への多様なニーズに対応するために行われた。また, 看護教育は, 終末期医療に関する国民の多様なニーズに対応できる人材教育を行う必要があった。したがって, 2000年以降に終末期看護に関する看護学教科書が出版されたと考えられる。しかしながら, 「希望」が記載されている看護学教科書は, 14件中6件と少なく, さらにページ数の割合は0.5～1.0%と低い結果であった。つまり, 看護学生が, 看護教育の場で終末期

がん患者の「希望」について学習する機会のごく僅かであることが考えられる。

抽出した「希望」記載内容を分類した結果，“国語辞典の引用”においては，文中の「希望」の解釈として，一般的な国語辞典に示されている「希望」の意味であった。本研究では，他の論文でも用いられている国語辞典を参考にし，総項目数50万を収めている日本最大級の『日本国語大辞典』に記載されている「希望」の意味に当てはまると考えた。したがって，“国語辞典の引用”は，全ての人に当てはまる「希望」を意味していることが明らかになった。

終末期がん患者の「希望」の先行研究において，「希望」の内容の局面は，【生き長らえたい】【家族とのつながりの中で生きたい】【思うように生きたい】【自分が存在しない将来への願い】【思うような最期でありたい】という5つのカテゴリーから構成された（久野，2002）。このように，終末期がん患者の「希望」は，自分の人生や他者との関係性の中で，自分の存在がどのように在りたいかという内容である。つまり，一般的な国語辞典で用いられている「希望」の意味では，概念が広すぎるため，看護学生は，終末期がん患者という特有の状況に合わせた「希望」を理解することは困難であると考えられる。

次に，“研究論文からの引用”において，心理，哲学，看護と様々な分野の引用がされており，「希望」の先行研究が豊富であることが明らかになった。また，研究論文が引用されている文献の「希望」は，将来の望ましい状態へ行動を起こす原動力となるという認知的な特徴と示したものが多かった。

川端（2015）は，がんの集学的治療を断念した4名の患者に対して，患者を支える希望の意味について面接調査から，患者の希望には【私で在ることの肯定】【つながりの意味づけ】【新たな未来の見通し】を可能にする力があり，看護師は，患者自

身の力で希望を創造できるように自己存在と関わりあう能力を高める援助が求められていると説明した。患者自身の力で「希望」を創造させるためには，看護師が意図的に認知的な援助を行う必要がある。しかしながら，心理，哲学，看護など複数の文脈を用いている現状では，看護教育における終末期がん患者の「希望」の理解を妨げる可能性がある。終末期がん看護における「希望」の先行研究は，ターミナルステージにある患者の「希望」と要因を明らかにした研究（射場，2004）や死を認知した再発・進行がん患者が希望を見出すプロセスの研究（角田・望月・神田，2016）など多数みられるが，「希望」の概念確立には至っていない。つまり，看護学生の理解力や認知力，経験や価値観によって「希望」の解釈が異なってくると考えられる。看護学生が，終末期がん患者の「希望」に対して意図的な援助が必要であると理解しなかった場合，援助はむしろ終末期がん患者にとっては，身体的，心理的負担となる可能性がある。濱田・佐藤（2006）は，身体状態が厳しい終末期がん患者においては，希望に関わる具体的な行動だけでなく，希望や目標達成のために計画を立て，楽しく気晴らしになることを想像するなどの認知的活動が重要であると述べた。終末期がん患者の「希望」を支える看護は，行動を伴う「希望」を支えることにとどまらず，意図的に認知的な援助を行うことにより，看護の役割である，人々の尊厳に働きかけ，人生の最終段階までその人らしく生きることを支えられるといえる。

今後の課題として，心理学の分野で「希望」や楽観性について実証的な研究がなされている一方で，看護学において「希望」を支える看護は，患者にとってどのような効果をもたらすのかという実証的な研究はなされていない。看護学生や看護師が終末期がん患者の「希望」についてどのような教育を受け，どのように理解し，ケアプランに反映しているのか，また，終末期がん患者へ実施し

たケアが、どのような効果をもたらしたのかといった実証的な研究をすることにより、認知的援助の方法を確立することができる。さらに、「希望」に関する看護教育が深化できるのではないかと考える。それらの研究の積み重ねにより、看護学における「希望」の概念化へと繋がると考える。

## V. まとめ

看護教育関連文書において、「希望」の記述内容の検討を試みた。その結果、「希望」が取り扱われている看護教育関連文献は少なかった。また、「希望」の内容は“国語辞典の引用”と“研究論文の引用”に大別された。看護学生にとって、看護における「希望」の概念を明確に理解することを妨げている可能性があり、概念化の必要性が示唆された。今後は、看護における「希望」についての必要性に関わる実証的な研究を進める必要がある。

## VI. 研究の限界

研究の限界は、看護学教科書の終末期、ターミナルケア、緩和ケア、成人看護学のデータ収集範囲という限定された分野においての調査となったことである。

## 引用文献

電子政府総合窓口 e-Gov (2015). 看護師等の人材確保の促進に関する法律施行規則(平成四年厚生省令六十一号). [https://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws\\_search/lsg0500/detail?lawId=404M50000100061](https://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=404M50000100061) (参照日:2020年8月23日).

濱田由香, 佐藤禮子(2006). 終末期がん患者の希望に関する研究. 日本がん看護学会誌, 16 (2). 15-25.

久野裕子(2002). 終末期がん患者の希望. 高知女子

大学看護学会誌27(1). 59-67.

射場典子(2004). ターミナルステージにあるがん患者の希望とそれに関連する要因の分析. 日本がん看護学会誌, 14(2). 66-77.

柏木哲夫, 大橋明, 恒藤暁(2003). 希望に関する概念の整理:心理学の観点から. 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 29. 100-124. doi:doi/10.18910/10319

川端愛(2015). がんの集学的治療を断念した患者を支える希望の意味. 日本がん看護学会誌, 29(2). 62-70.

木村登紀子(2009). つながりあう「いのち」の心理臨床 患者と家族の理解とケアのために. pp.118-125. 新曜社.

厚生労働省医政局(2015). 健康・医療看護職員確保対策. <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000103782.pdf> (参照日:2020年8月23日).

厚生労働省医政局(2019). 看護基礎教育検討会. [https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-isei\\_544319.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-isei_544319.html) (参照日2020年8月23日)

厚生労働省政策統括官付参事官付人口動態・保健社会統計室(2019). 平成30年(2018)人口動態統計(推定数)の概況. [https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei18/dl/11\\_h7.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei18/dl/11_h7.pdf) (参照2020年3月24日).

日本国語大辞典, 第2版(2001). 4. 小学館. pp.255.

文部科学省初等中等教育局教科書課(2009). 教科書制度の概要1.教科書とは [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kyoukasho/gaiyou/04060901/1235086.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/gaiyou/04060901/1235086.htm) (参照日:2020年8月23日)

文部科学省政府・審議会(2020). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会(2019). [https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt-igaku-000006272\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt-igaku-000006272_1.pdf) (参照日:2020年8月23日).

世界保健機関編, 武田文和訳(1990). がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケアーがん患者の生命へのよき支援のために-. 金原出版. pp14-15.

- セリグマン (2004). 世界でひとつだけの幸せ ポジティブ心理学が教えてくれる満ち足りた人生. 第1版. アスペクト. pp.88-151.
- 島井哲志 (編) (2006). ポジティブ心理学21世紀の心理学の可能性. ナカシマヤ出版. pp.160-173.
- 島井哲志, 小林正弥 (2020). ポジティブな地域づくりを考えるために. 保健師ジャーナル. 76 (7), 595-600.
- 田村恵子, 笹原朋代, 梅田恵 (2018). 新体系看護学全書 経過別成人看護学④終末期看護:エンド・オブ・ライフ・ケア. 第1版, 4. メヂカルフレンド社. pp.18, 48-55, 60.
- 角田明美, 望月留加, 神田清子 (2016). 死を認知した再発・進行がん患者が希望を見出すプロセス .THE KITAKANTO MEDICAL JOURNAL. 66. 201-209.